

母の故郷 ⑥

— 福永津義・人間ひととその仕事 —

高橋 さやか

(V 承前)

「母の歌と愛撫の歌」にフレーベルがとりあげているのは、知らず知らずのうちに母親が子どもの様子——ちょっとした表情や動作に敏感に素早く対応することにかかわる、教育上みのがすことのできない深い意味であった。極めて日常的な状態の中で、実は、母親は母親として必要な子に対する思いやりや愛情を、子ども自身に触

発されて開花させるのであり、また、子どもは自分が知らず知らずの中に抽き出し高め深め強めている、母の愛情によって守られ導かれ、ますます健全に心身を習練し成長を達成する活動をつづける。母と子は、互いに自分を成長させ高めてゆくための、相手のよりよい能力を抽き出し合っており、その相互関係において、より充実した相互のいとなみを発展させつづける。それが、フレーベルが母と子のあり様において直観した教育の奥義とも

いすべき理念であった。……そのように、神が、本能として人間の母と子に与えられた生命の具え、それに目覚め、それを自覚して、生き、生活し、子どもとともに育つ母、——叡智ある母、であれ、とフレーベルは説く。

津義は、(さきにもふれ、また重ねていうようであるが)「母の本能を叡智に」というフレーベルに、自分の全生活を傾倒する形で共鳴協調した。

津義におけるフレーベル「母の歌と愛撫の歌」——特に「遊びの(愛撫の)歌」にかかわる理解と実践のユニークなところは、「足をばたばた」「ぼったりこ坊やがころぶ」をはじめとするその一つ一つに、日本的となえることは、日本流の(津義流の、といってもよいかと思うが)民謡風わらべ歌風な遊びうたを連繫させ、また、聖書のことばを連想・引用していることである。

「足をばたばた」

「ぼったりこ 坊やがころぶ」に対応して「びんこびんこ、にんぎにんぎ、ちょちちょち、あわわ」「かいぐり、かいぐり、とっとの目」の手遊びをあわせ、「ぎっこん

ぼったん、おつきして(起き上って)ねんねして」「高い高い、すとーん(低い)」「あんよは上手、ここまでおいで、おころびお下手、どんどん来やれ」と動作あそびに入ってゆく。

「糶摺り すりよ、 糶やまだすれんか糠こそ 出来た、

箕を持って来い、 炊て食わそ」

「ぎっこんこ ぼっこんこ

爺ぢやうに一反 織オリって着キしよ

婆ばばに一反 織オリって着キしよ」

は、筆者が幼いころ遊んでもらい聞かせてもらった、多分熊本の民謡である。ぎっこんぼったん、の動作にあわせたものであった。

「ずいずい ずっころばし ごまみそずい 茶壺チャウに追われて とっぴんしゃん ぬけたら どんどこしよ 俵ハコの鼠ねずみが 米喰コメクって ちゅう ちゅう ちゅう ちゅう お父おとさんがよんでも お母おつかさんがよんでも 行きいっこなあしよ」も関連してよく用いた手あそび歌であったが、終

りの詞は甚だ氣に入らず 「父ちちさんが呼んだら 母かあさんがよんだら すーぐに行くよ」とうたい直したものであった。同様の手あそび歌に

「一里けんじょ 二けんじょ 三けんじょ 四けんじょ
しけんま ほたたの のりこまの うえに あめ牛 毛
牛け 猿いさが杖ひいて ぎっというて こるひけは こる
ひけ」という、ふしぎな、大部分意味不明の（筆者にとつては）歌があった。今思うと、一里けんじょ、は見所または検所、ではないかと思う。「しけんま ほたたののりこまの うえに」はどうしてもわからない。あめ牛毛牛は赤牛——鮎色（べっこうあめのような茶色）の牛のような気分であつていた。猿いさが杖ひいて、はいいとして、ぎっというて、はかけ声でもあろうか、こるひけ、は熊本弁の音便で、これ引け、に違いない。遊び方は要するにずいずいところぼしと同様である。軽く握つたこぶしを、人差指と拇指で小さく円形に空けた方を上に、輪になった数人が両手を出して、一人が指で、ちょいちょいと突いてゆく。うたの最後に急にこぶしを

握りしめる形で、突いて来た指を捕えるのと、握りしめられる直前に素早くひっこめるのと、短い間のやりとりの呼吸を楽しむ。「ちょちちょち、あわわ、かいぐりかいぐり、とつとの目」「はなはなはな……目（耳、口、頭、顎、おでこ、等どこでもよい）」からやがて「ずいずいところぼし」「一里けんじょ」に移り、時には一がさした、二がさした、三がさした、……と手の甲を代り番に軽くつまんで、「ハ（蜂）がさした！ ぶん／＼／＼／＼」と、「ハ」に当たった子が皆を強くつねろうと追いかける、皆ははつと手をひっこめて逃げる、という遊びもあつた。

これらの遊びには、手足を動かすこと——屈伸運動力、上下する運動、当って跳ね返る運動、引きあつたり放したりする運動、などが含まれている。

「いない、いない、ばあ」「見えた、見えた」の遊びも、さらには四、五歳児に遊ばれる「ハンカチ取り」「子とろ子とろ」「天神さまの細道」など、引っぱりっこを伴う遊びも、「足をばたばた」「ぼったりこ坊やがころぶ」

の延長線上の遊びとして考えられていたようである。

子どもの内発的な衝動に対応し、手ごたえ（足のふみごたえ、蹴りごたえ）のある刺激を与える母の動きが、子どもに快こころよい反復運動をもたらし、子どもの活動を一層力強く発展させる。

幼いころ、遊んでもらっていて、勿論これらの遊びのもつ意味に気付いたわけではないし、遊びも、唱えことばや民謡も、すでに半ば茫々とおぼろに霞む記憶の彼方に溶け去ろうとするようであるが、それでもなお、これらの歌と遊びとは、意外に鮮やかに、津義が学生や母親たちに語った「家庭及び両親教育」——そのテキストに「母の歌と愛撫の歌」を用いた、その講義のことば、声音に重なり合い、次第に確実に新鮮にひびいてくるのである。

この、母と子の遊びの、最初のひと二に、津義は（フレーベルに拠よって）、教育における母子関係の、一生を通じての基本原則を見出している、と言えるようである。

子の動作、子の生活活動は、ほんの、全く何気ないようなごく単純なものであっても、生命を維持し、生命を成長発展させる意義のこもったものであり、それを見守り、支え、対応し、対抗する相手ともなる母は、どこまでも、子ども自身が自分の力を発揮することによって、子ども自身が自分の力を発見し、試し、一つずつ段階をふみ越えふみ上ってゆくことを、その時その時の子どもがあり様に相応ふさわしく保障するものである。母は、子どもの自由をどこまでも認めながら、しかも、その自由が、彼自身を常に力強く（時時に事に当り倒れ挫折することがあっても）立ち直らせ立ち上らせ、再び確かな歩み・働きをつづけるように見守り支えるものである。その、認め、見守り、支えるいとなみが、「足をばたばた」「はったりこ坊やがころぶ」から誘い出される一連の遊びの中に、具体的に予見され、予習されている。

「もうない（おしまい）」も、「味の歌」も「鳩をよべ」「小さい魚」「花かご」「小さな橋」等々、どれ一つをとっても、重要な、意義深い、……そうでないものはない

けれども、何といつても、この母と子の遊びの最初に掲げられている遊びこそは、(それは同時に母子のいとなみの出発点をなす遊び、でもあるが)母に母の使命を根づかせ培うところの、そういう意味で全篇の集約をなすもの、といえる。——そう、津義はうけとめていた、と見て間違つてはいないと思う。津義はさらに、このところの積義をのべながら、次のような引用も加えた。

「いづこに在るとても、母見て居申す」ということが、江戸に遊学した本居宜長にその母が書き与えた書状の中にある、と言ひ、一人の日本の母の、したたかな母ごころを、親しみをこめて誇りやかに、——フレーベルの要望する母のあり様をすでに実現している一例として、その一例を自分の同国の同性に見出すよるこびを以て、津義は語つたものである。

ともあれ、津義の、この「母と子の遊び」の最初の部分は、津義が最も多くくり返し、くり返す度に熱をこめて語りつづけたものであった。

☆ ☆

☆ ☆

愛の使徒ヨハネのことを、くり返し読みたいと思ひます。

「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、み子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

「主は、わたしのためにいのちを捨てて下さった。それによつて愛ということを知った。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互いに愛しあうべきである」(ヨハネの第一の手紙より)

愛されるよろこびは、愛するよろこびと育ち、感謝されるうれしさは、感謝を捧げるたのしさを知らせてくれます。愛し愛され、感謝し感謝される生活、その中にはおのずと奉仕と希望の生活が生れて参りましょう。神なる父は、人の子たちが、そのような至善な生活をもつようと「愛育の本能」「いとおしと思う真

情」を、創造の日に、母であるべきひと、に賦与されたのだと、フレーベルは信じたのです。

フレーベルはこの項にそえた図解で、海や山、野原や川辺、自然の世界に出て行って、子どもたちと一語にできるだけ多く遊ぶように、とすすめております。

自然の中で、深々と呼吸し、のびのびと動き、思う存分開放感を楽しむ、というのは、必ずしも子どもだけではなく、若者も壮年も老人も、人皆同じと言えましよう。このような無心な、何の構えもない遊樂、うごきの中で、人は、その人その人の、その時その時の、身体、知識、精神、心情のありのまま（真実）な状態を赤裸々に語り表現するものです。

このような時、このような事に、心をとめて見守り、思いめぐらす母・保育教育者たちは、或いは傍観者のように、或いは子どもと一緒に遊び呆けているように、していながら、よく対象にきき、対象を知る睿智と洞察の力とを養われ、人それぞれにふさわしい教

育をしそえ木になることができるのだ、とフレーベルは言うのです。

昨日の子ども、今日の子どもの、自由で自然な遊び、必然的な生活活動を通して、明日の子どもの必要、要求に応えることができる、そしてはじめて、親も教育者も、自分の鑄型に子ども・対象をはめこむのではなく、対象それぞれに賦与された生命の本質、その持ち味、特長を生かすことができます。

人が、それぞれにふさわしく、生きることに、それが、それぞれに異なる計画を立て、異なる賜物を与えられた創造者のよろこびでもあり、子なる人々の全き幸福でもある、と、これは彼の教育の信念とも考えられます。そして、自然の事物と事象、それは創造の主であり、父であられる神が、被造物——生みの子たち——を、いとおしみそえ立て給うに最もふさわしい場と教材とを、自らのみ手で設定し給うた教室、というのでありましょうか。

「もろもろの天は神の栄光をあらはし、

おおぞらはみ手のわざをしめす

この日ことばをかの日につたへ

このよ知識をかの夜におくる

語らず言はず その声きこえざるに

そのひびきは全地にあまねく

そのことばは地のはてにまで及ぶ

神はかしこに帷幄を日のために設け給へり

日は新郎が祝いの殿を出るが如く

勇士がきそひ走るをよろこぶに似たり

そのいでたつや天の涯よりし

そのめぐり行くや天のはてにいたる

ものとして

そのあたたまりをこうぶらざるはなし

神の法は全くして靈魂を生きかへらしめ

神の証詞はかたくして

愚なるものを智からしむ

神の訓諭はなほくして心をよろこばしめ

神の戒命はきよくして

眼をあきらかならしむ

たれか おのれの過失を知り得んや

願はくは我をかくれたる愆より解き放ち給へ

願はくはなんじの僕をひきとめて

故意なる罪を犯さしめず

それをわが主たりしめ給ふなかれ

さればわれ玷なきものとなりて

大いなる愆をまぬかるゝを得ん

神 わが磐 わが贖ひ主よ

わが口のことばわが心のおもひ

なんじの前に

悦ばるゝことを得しめ給へ

(詩篇一九)

☆ ☆

☆ ☆

津義は「足をばたばた」の解説の終りを、このように記述している。

津義にとって、「母の歌、母と子の遊び」は、最早実践保育のテキスト、できえもなく生活活動そのもの、彼フリーベルの教育哲学の生活化、聖書の生活化、をちりばめた日常的現実の形象化にはかならなかった。

「母と子の遊び」において、津義は、フリーベルと共に、フリーベルその人と共同して『子らに生き』たのである。

フリーベルが「宗教教育家」としば／＼いわれていることについて、一般には、普遍的な意味での教育家ではなく特異な、独得なあり方で宗教に著しく傾斜した教育家である、というようなうけとられ方があるのに対し、津義は、宗教教育家こそ真の教育家である、との思いで心からの讃嘆と親愛とをよせていた。津義自身、フリーベルに極めて近い、同質、とも言えるであろう宗教教育家であったのである。

(西南女学院)

